

第4章 神奈川県立鶴見総合高校の取り組み



松本靖史

鶴見総合高校教諭

1. はじめに

神奈川県立鶴見総合高校は、神奈川県立の県立高校再編計画にもとづいて県立平安高校と県立寛政高校が再編統合し、2004年に開校した総合学科高校である。本校は、横浜市鶴見区の臨海部に位置するが、本校が所在する地域には、以前より歴史的経緯から多数の外国籍市民が居住していたが、1990年の入国管理法改正後、とくに南米系の外国籍市民が急増していった。現在でも鶴見区は、中区について外国籍市民が多く、南米出身者は高い割合を占めている。

そういった状況の中で、本校の前身の一つである寛政高校に、地元の中学校より外国籍生徒の受け入れを求める強い要望があり、その要望に応える形で受け入れを始めたのが外国につながる生徒たちと本校の関わりのはじまりである。

寛政高校が平安高校と再編統合されるなか、新校でも外国籍生徒を積極的に受け入れることになり、鶴見総合の最初の入学者選抜（後期選抜）から、15名の在県外国人特別募集枠も持つようになって現在に至っている。

2. 鶴見総合高校の外国につながる生徒とその把握

鶴見総合には現在（2008年度現在）、78名の外国につながる生徒が在籍してい

る（うち45名が在県外国人特別募集枠で入学した生徒である）。

県教育委員会は、例年5月に外国籍生徒の「在籍調査」を実施するように各校に指示している。これは行政上の統計資料として、国や県の施策に反映させるためだけでなく、入学してきた生徒の状況を正確に把握し、支援方法を考えるためでもある。本校では入学時に、保護者にその趣旨を説明し、全員に「公文書記載用カード」に国籍、海外での生活経験（国名、来日時期、来日時の年齢、来日時の編入学年）の記載をお願いしている。また同時に、日本語を母語としない保護者に対しは、保護者の母語、面接時の通訳や文書の翻訳の必要の有無などについても記載をお願いしている。これは、当該生徒の家庭内言語や学習歴を知る上で、重要な役割を果たしている。

また入学前に、校内作成の問題による「日本語調査」を行い、生徒の日本語取得状況を把握し、学習指導の基礎資料としている。

3. 校内での支援の取り組み

①校内組織と教員の研修

外国につながる生徒を組織的に支援するために、「外国人生徒支援担当」（活動支援、生活支援、キャリア形成支援の三つの校務分掌と年次（学年）から当事者が選出される）という組織を設けている。この「外国人生徒支援担当」が、鶴見総合の外国につながる生徒の支援の中核で、教職員に対する年2回の校内研修や連絡調整などを行っている。校内研修の内容としては、過去には外国人生徒支援のあり方、聞き取り調査の報告などを行っている。

現在、「外国につながる生徒の教育指針」の作成を予定しており、学校としての支援がより明確な形になるよう検討している。

②学校生活の面

2007年度より、生徒会のなかに外国につながる生徒と日本人生徒がともに理解しあう場として多文化交流委員会が設置された。多文化交流委員会は、校内や校外の企画にさまざまな形で参加している。とくに文化祭では、日本人生徒と外国につながる生徒が、多文化などのテーマにそって自由に語り合う「しゃべり場」という企画を実施している。

③学習の面

日本語による学習が困難な生徒に対しては（最長3年次まで）、国語（国語総合、現代国語、国語表現）、地理歴史（世界史・地理）、公民（現代社会）、保健の授業に関しては、別室において個別対応授業（「取り出し授業」）を行っている。こ

れに関しては、各教科の担当者が授業を行っているが、教科書を音読することや具体物を利用するなどさまざまな工夫を行っている。また生徒の母国の文化を調べ学習の形でいき、他の授業で発表させるといった工夫も行われている。

本校は総合学科高校なので、さまざまな総合選択科目を設置しているが、そのなかに日本語指導として日本語、母語保障としてポルトガル語・中国語の授業を設置している。

学習における理解を助ける手だてとして、一部の科目においては、キーワードの母語訳集を作成している。また、放課後や定期試験前には学習サポートを実施している。参加生徒の数は波があるが、学習の習慣をつける機会になっている。

④保護者に対して

現在、外国につながる生徒の保護者に対しては、ルビふりの文書を配布しているが、通常の文面にルビをふっている状態なので、文面そのものをわかりやすくする必要もある。そのほか、保護者面談の際には、通訳を配置している。この面談の通訳費用に関しては、県の通訳支援事業の制度を活用している。

⑤入学希望者に対して

在県外国人特別募集枠をもっている学校であることから、外国人の入学希望者に対しては特別の説明会を行っている。ここでは、入学パンフレットの外国語版（英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、タガログ語）を用意し、通訳も配置している。また、在校生に「体験談」を語ってもらい、高校生活を具体的にイメージできるようにしている。在校生の話に対する入学希望者および保護者の関心は高く、熱心に話を聞いている。

4. 学校の外とのつながり

①学校外の力を借りる

本校では、さまざまな場面で学校外の力を借りている。

●教育コーディネーター

2007年度からは、県教育委員会とNGO（多文化共生教育ネットワークかながわ）との協働事業（外国につながる子供たちへの教育・進路サポート事業）により、本校に「多文化教育コーディネーター」が派遣されている。サポート内容は各学校に任されているが、2007・8年度は、横浜市立大学の坪谷美欧子准教授による「生徒への聞き取り」「教員への聞き取り」を行い、生徒がどのように考えているか、教員がどう受けとめているのか等の現状を把握し、研修会を通し理解の共有化を図った。またその関連で、2008年度は、外国につながる生徒が、

横浜市立大学の講座「多文化社会と異文化理解—国境を超える人の移動」のゲストスピーカーとして、大学生を対象に自分の考えを話す機会があった。

●学習サポート

放課後や定期試験前の学習サポートに関しては、ボランティアの力に頼っている。ボランティアは、大学生や社会人のボランティアであり、非常に熱心に指導していただいている。さまざまな人たちに接することによる生徒の成長もあり、「教員でない強み」も見られる。

②学校の取り組みを外に発信する

多文化交流委員会は、神奈川県国際交流財団主催の「あーすフェスタ」や鶴見の外国人児童生徒保護者交流会（IAPE）主催の「イアベまつり」にボランティアなどに参加することによって、活動を外に発信している。また、神奈川県の総合学科高校の夏季公開講座「まちを歩く・食べる・知る」の交流会で、他の総合学科高校の生徒と交流し、話し合い活動などを行っている。

2008年度には、県立学校公開講座「アジアの料理をモノにしよう！」を開催し、保護者が講師となり近隣住民などを対象に外国家庭料理講座（フィリピン料理と韓国料理）を開講した。

5. 今後への課題

鶴見総合高校の外国につながる生徒に対する支援を充実させるためには、外部とのつながりは不可欠である。

他の特別募集枠を持っている高校とは、県教育委員会の主催による「在県外国人等特別募集実施校連絡会議」が年2回あり情報交換の場があるが、現在のところ、小学校・中学校との定期的な連絡会は実施しておらず、学校間の連携が意外と弱い部分になっている。学校の多忙化が言われるなか、時間の確保が非常に困難であるが、情報交換のほか、教科指導における教材や指導方法の工夫改善のためにも連携は必要であろう。

学校が外部とのつながりを充実させるためには、個人の力に頼ったつながりから、組織としてのつながりに発展させていく必要がある。これは、職員の異動によるネットワークの断絶を防ぐ意味で非常に重要である。ただしこの組織的なつながりを円滑にするためには、校内と外部をつなぎ、校内の連絡調整を行うコーディネーター的な存在が必要不可欠である。可能であれば大学等の講座を受講するなど専門的知識を身につけているのが望ましいが、特別募集枠を持っている学校が校内で人材を育成していくといったことも今後必要であると考えている。